

自然科学者と生活意識

戸坂 潤

現代における知能分子（インテリゲンチヤ）にまず注目してみよう。ここで知能分子またはインテリゲンチヤと呼ぶのは必ずしもブルジョアジーとプロレタリアートとの間の中間層に結び付いた特殊層全部を意味するのではない。こういう中間層に結び付いた特殊社会層としてのインテリゲンチヤは、広く中等または高等普通教育を受けた分子又はそれ以上の常識所有者を包含するので、例えば一般のサラリーマン（中小官公吏・社員等）は当然これに^{はい}這入る最も目立った要素であるが、今はもっと狭い、或いはもっと高級の、知能分子を考えているのである。というのは所謂^{いわゆる}インテリゲンチヤの内でも特に知能の訓練と蓄積とを生活手段としているものを指すので、一方では自然科学者や技術家、他方では各種のイデオローゲン（言論家）がこれに数えられる。

イデオローゲンとは社会学者・哲学者・文学者・評論家・文士・ジャーナリスト・政論家などを含む一群の知能分子であり、自然科学者と技術家とはさし当り一つのものと考えて（その区別は別の機会に論じよう）、他群の知能分子をなしていると思われる。

処で問題は、自然科学者乃至^な技術家の、社会や文化に就^ついての意識と、イデオローゲンのそれとの間に横たわる処の相違である。そして個人個人の場合に就^ついていえば可^なり^りの出^で這^{はい}入^りりはあるにし

ても、総括的な平均値から見ると、こうした意識の相違は全く、自然科学者乃至技術家としての、又イデオロゲンとしての、彼等の夫々の社会生活条件によって決定されている。このことは、判り切ったことであるように見えて、併しいざとなると色々反対意見が出て来る一つの事実なのである。彼等の意識が彼等の社会生活条件によって決つて来るという見解は、元来が一つの根本的な社会科学的認識にぞくすることなのだが、自然科学者や技術家にはこうした認識にあまり重きを置いていない人達が甚だ多いようだし、社会科学者でさえが或る傾向の者は之を承認したがない場合が多い。併しそれは取りも直さず、彼等のそうした意識自身が、自然科学者乃至技術家としての、また或る傾向の社会科学者としての、彼等の社会生活から来るという証拠に他ならない。

先ず第一に自然科学者乃至高級技術家（テヒノローゲン）の殆んど総てが、教師・研究所員・官庁又は会社の技師・として生活しているという事実に注意しなければならぬ。それは自然科学乃至技術（又技術学）そのものの性質から当然出て来ることで、学校とか研究所とか官庁・会社・等のインスティテュートを辞れて、個人的に仕事をするということは、今日の自然科学や技術乃至技術学に就いて殆んど絶対に不可能か又は無意味になつてゐるからである。

処がこのような仕事の形式からいつても欠くことの出来ない、また生活の必要からいつても絶対的な条件であるインスティテュートは、或る意味では完全にアカデミカルなものだといつて好いだろう。と同時に、そこで働く自然科学者や技術家はまた特別にアカデミシヤンの名に値いするのである。彼等は自分の生活と仕事を夫々のインスティテュート（いわば営利的近代アカデミーを含む）にだけ結び付ければ一応の功績と生活の安定とを得るのだから、インスティテュート又は広義の

アカデミーの外に横たわる社会、政治や思想や文学が行なわれている社会、に対しては必ずしも直接の利害関係を有^もたない。だから彼等の生活意識自身がアカデミックにならざるを得ない。

イデオロゲンは之に反して大体からいってジャーナリストティックだといって好^よいだろう。政治家は、とにかく演説ということが仕事の一つだという建前になっているし、文士は文章を売って生活を立てている。どれも社会的表現報道の形式を有^もつた仕事を引き受けているから、ジャーナリストティックだというのである。

なる程イデオロゲンでも、社会学者や哲学者になれば、一定のアカデミーの外へ一步も出ないまた出たがらない、種類の者もいることは無視出来ない事実だが、併^{しか}し全体からいえば自然科学者や技術家に較べて、ジャーナリストティックな活動は彼等に付きものになっているとさえ考えられている通りで、この点だけを見ても、両者の相違は明らかだろう。自然科学者や技術家でも或る少数の人は優れたジャーナリストである場合を沢山挙げることが出来るが、この現象は自然科学者や技術家が偶^{たまたま}々イデオログの資格を兼ね備えた場合だと見るべきだろう。そういう社会生活条件から、アカデミシヤンたる自然科学者や技術家は、甚^{はなは}だ往々にして、ジャーナリズム一般に対する筋の通らない漫然とした反感又は軽侮の気持を有^もつのを常とする。之は法文経の大学教授などにも見うけられなくはない現象だが、多くの科学者や技術家に取^もつてはジャーナリストティックな活動は「余技」として、或いは一種の墮落として、さえ映じるのである。

無論科学者や技術家の本格的な研究は必ずしもジャーナリストティックな表現を有^もてないだろうし、又仮^もに有^もてたにしても敢^あえて有^もつ必要のない場合の方が多^いだろうが、併^{しか}し一方に於^てラッセルや

ジーンズ又エディントン等が卓越した「文章家」であることも忘れてはならないのである。

科学者や技術家のジャーナリズムに対する反感は、一寸見ると彼等の意識が純潔で、文化の神聖を尊重しない今日のブルジョア・ジャーナリズムに対する適切な応報であるように見えるが、実際は、そうした批判的な根拠から来ることは寧ろ少ないので、大抵の場合は彼等の歴史観的・世界観的・一般素養の低いことから来ているようである。自然科学や技術は人間の歴史を貫く文化の流れに結び付いて活動しているのだから、科学や技術の歴史的考察や哲学的省察という多少ともジャーナリストイックな仕事を除外しては、科学者や技術家の仕事の目標自身がどこにも見つかからない筈なのだ。処が科学者や技術家は、そのアカデミカルな偏向のお蔭で、そうした顧慮を払うことが常識的にいっても必要であることを、あまり真面目には意識し得ないようである。

自然科学者乃至技術家の反ジャーナリズム的意識は併し、一定の階級的な性質を帯びていることを第二に注意しよう。これはよく言われることではあるが、わが国の科学者や技術家には、まだあまりピンと来ないように見受けられる。

彼等のアカデミカルな意識が、歪曲された資本主義的ジャーナリズムに対する反抗意識から来るにしろ、或いは寧ろその歴史観的・世界観的・な一般素養の欠乏から来るにしろ、一種の高踏主義・貴族意識・に結び付いていることは争われない心事ではないかと思う。

彼等は自分の生活の安定、生活の生き甲斐、仕事の純粹さ(?)等々によって、塵にまみれた下界から自分を引き離す。失業、生存闘争、政治的闘争、等々は自分達にまずまず及んでくる問題ではな

い。と共に資本家や政治家の営々とした併し無意義な生活も決して同情に値いしない。凡そそうしたキタない生活から自分達は自由だ。自分達は優れた専門家であり、かけ代えないエキスパートだ。ただの素人とはわけが違う、こうした貴族意識は彼等のかくれた心事であるようである。

高踏主義・貴族主義・も一つの趣味として或いは尊重されていいかも知れぬ。だが、この趣味が彼等の社会生活を隈なく支配し始めると、それはも早や趣味だといって済ませなくなる。それははしなくも科学者や技術家の階級意識又は階級性の地層をのぞかせることになるのである。

科学者や技術家の一種の貴族趣味は、彼等に、社会の大衆からの優越従つて又超越を意識させる。イデオロゲンもそうした意識を有たないのではないが、科学者乃至技術家はその技術的素養からいつても生活の安定からいつても、ずっと自信を強くしていることが出来る。要するに彼等は抑々無産者大衆とは生活範疇が全く別なのだ。併し彼等は又ブルジョアジーとも異つた生活意識を有っている。彼等の多くは有産者の出であり、又自分自身有産者であるのだが、そういう資格によって、ブルジョアジーと同一視されることを肯んじないということが、即ちブルジョアジーと彼等との相違をなしているのである。

彼等は多くブルジョア又はプチ・ブルジョアにぞくするかも知れない。だがそういう階級的区別とは無関係に、技術家は技術家であり、科学者は科学者なのだ、とそう彼等は考える。だから自然科学者乃至技術家は、階級的な中立を堅持し得る最も信頼すべき分子だということになる。

だが中立とか厳正中立とかいうもの程、論理学的にナンセンスなものはない。まして社会階級の対立場裏において、中立し得ると思つ程、非科学的で非技術的なことはない。今日のブルジョア社会

において打ち見た処、これ程までに対立が緊張している階級社会において、安心して社会から優遇を受けているということが、中立の実質だとすれば、中立程便宜なものはあるまい。

同じく中立であるべきイデオロゲンは、不幸にしてその仕事の性質からいっても、中立を標榜することが最も困難な処から、心ある者は日に日にブルジョア社会の圧迫の下に身を狭めて行きつつあるのに、自然科学者や技術家は国家や大資本のインスティテュートにおいて、資本のための技術や科学に平穩な生涯を捧げているのである。

多くの自然科学者や技術家の階級的中立とはこうした実質のものだが、それが彼等によつて意識されるに際して、例の超然とした貴族主義の形を取るから、何か高価な尊敬すべきもののように受け取られるのである。そこから例のジャーナリズムに対する一般的な軽侮も出て来たわけで、ジャーナリズムの悪いのは、それが資本によつて歪曲された社会活動だからではなくて、何にせよ大衆などを相手にした二流以下の活動だという理由からだったに過ぎないのである。

例えば理論物理学者の専門家が大衆に不親切に見えるのは或いは已むを得ないだろう。高級な理論を数学抜きで結論だけを書いたような物理学のポピュラリゼーションをして見ても、科学の側からも大衆の側からも、今の場合あまり利益でないかも知れぬ。物理学者のイデオロギーはこのポピュラリゼーションの有無にはなくて、その世界観の方でもっと能く現われるのだから、その方がずっと問題としては根本的だろう。現に、今日行なわれている物理学者の通俗講演の類は、科学のポピュラリゼーションに名を借りて、杜撰極まる観念論の鼓吹や信心の告白に他ならないものが多いだろう。即ち彼等の貴族趣味も実はブルジョア・イデオロギーのためならば、いつでも犠牲にして構わな

いのである。

併ししか例えば応用化学者や農芸化学者は大衆に親切なのか、不親切なのか、よほどよく考えて見ないと判らない。大衆は彼等の研究によって安くて使用価値の多い物品を提供されるのだが併ししか他方において、それだけより多く資本の重圧は大衆に加わるわけだからである（一般に技術家はこの種の自然科学者である）。貴族趣味が減じたと思うとその代りに資本が口を利き始めるのである。

日本で一等発達しているといわれている医学になると、関係はもつと複雑になる。日本医学の発達は専らもっぱら医学博士の論文によつて促されるのだが、ただの医学士が博士になることによつて不幸な大衆は門前払いを食わなければならぬだろう。医学発達をあまね遍く無産者大衆に均霑きんてんするためには、医学博士の数が無限に増大し従つて日本医学が無限に発達して了しまう日を持たねばならぬだろう。

場合場合を例で示して行けば限りがないが、中立であるべき自然科学者や技術家が、その実際に行なっている仕事から言つて、従つて又そのイデオロギーから言つて、決して中立などでないことはこれで判るだろう。科学や技術は無論第一に科学者や技術家の手中に置かれている、だがそれが即ちブルジョアジーの手に収められていることである。自然科学者や技術家は通則として、それを意識しないか、又は意識しようとしませんか、それとも却つて意識的にブルジョアジーに奉仕しようと思つている。そして彼等は、私が今云うようなことを云うイデオログを、本能的に憎むのである。

7
私はすでに、自然科学者ないし乃至技術家がイデオロゲンに対する一般的反感、又はジャーナリズム一般に対する敵意、を指摘した。それが一種の貴族趣味の形をとり、そして階級的中立の意識を通し

て、それが階級性又は階級意識を暴露する点もまた指摘した所である。

だが前に見たように、一般的なジャーナリズムの世界で活動している自然科学者も決して数からいつて少なくないとはいえないので、従つてそういう科学者達は必ずしもイデオログそのものに反感を有つ理由はないのだ。要点は彼等の殆んど凡てがイデオログンが有つ或る特定のイデオロギーに反感を有つていふことである。日本に於ては、「權威ある」科学者から最も敬遠され又最も憎まれてゐるのはマルクス主義乃至所謂唯物弁証法なのである。

わが国などに於ては有力な社会学者（歴史家も亦）の殆んど凡ては多かれ少なかれマルクス主義の洗礼を受けている。最もギルド的に意識の固定した文学者や文士さえが、その半ばはマルクス主義を奉じている。処が自然科学や技術家になると、唯物弁証法に就いて真面目に考えて見た者さえ殆んど指で以て数える程しかない。ましてマルクス主義的見地に立つたものは殆んどないと云つていい位なのが日本に特有な事実である。

マルクス主義は社会科学や歴史の認識にあて嵌まるだろう。だが自然科学に就いては唯物弁証法などはただのフレーゼに過ぎない、とでもいうかのように、「權威ある」自然科学者や技術家は押しなべて反マルクス主義者なのである。併し技術は一体社会的歴史的な範疇ではないか。そして技術によつて促され、或いは技術を促すことにならないような自然科学はどこにあつたか。自然科学も一つの社会的な所産だという事実をどう片づけるのか。それに又唯物弁証法は歴史の内には存在しても自然の内にはあり得ないというなら、それは一頃わが国で広く散在していた似而非マルクス主義者の代表的な迷信だ。

自然科学者の研究対象である自然、従ってその側にぞくする限りの技術家の対象は、社会と別だ
 という点から、従って社会階級の対立関係から縁遠いという点から、自分の研究対象を相当充分にこ
 なした自然科学者や技術家でも他の一般的な社会常識を欠く限り、研究方法をマルクス主義的・唯物
 論的・に用いるという見解に到着するには永い時間がかかるだろう。

併ししかそれだけではなく、既にいったように、自然科学や技術学の研究は、今日では個人的施設によ
 るものは不可能になって、一定のインスティテュートを離れることが出来なくなつたから、当然それ
 ぞれの社会における支配的な勢力の庇護ひごの下にしか本当の研究は出来にくい。で、単に研究対象の
 性質から直接に制約されるばかりではなく、研究手段からの制約からいっても、自然科学者や技術家
 は唯物論的イデオロギーに対して自然と縁遠くなるのは尤もともだろう。

彼等のイデオロギーを今日の多くのイデオロゲンが有もつているような社会常識水準にまで高め
 又は変革するためには、だから、一方において彼等の研究方法そのものに直接唯物論的示唆しきを与える
 ばかりではなく、より手取り早くは、彼等の社会意識をかき立てることによって、イデオロギー理論
 の見解を示唆しきしなければならぬだろう。イデオロゲンは今日こうした役割を引き受けるもので
 なければならぬ。

ソヴェート同盟のように社会の支配的勢力が勤労無産者であり、その支配的なイデオロギーがマ
 ルクス主義である場合には、自然科学者も技術家も、その旧来の政治的中立の惰性かかわにも拘かわらず、自然
 科学ないし乃至技術の社会主義的意義を理解することは可かなり容易であり、従ってそれが自然科学者乃至
 技術家の研究そのものへ示唆を与えることも亦容易であるが、こうした社会体制に這入はいっていない

諸国では、今云ったイデオロゲンの仕事は決して容易なことではない。

第一に、イデオロゲンが、自然科学者や技術家のこうした一種の啓蒙の役割を引き受けようなどとすると、自然科学者や技術家の例の貴族意識は甚だ不満を覚えるだろう。専門家である吾々が何だつて素人の容喙ようかいを俟まとうか、と彼等はいうだろう。なる程一般にイデオロゲンは自然科学や技術の世界で素人だが、併しかし、イデオロゲンとしては一個の専門家・技術家・なのである。之に反して例の「専門家」は一般に極めて薄弱な哲学者であることが今日の事実だといつていい。

科学者・技術家・とイデオロゲンとの結合、これは科学者・技術家・にとって必要であるばかりではなく、イデオロゲンにとつても同様に必要な結合である。科学者・技術家・側の例の貴族的独尊と、これに対するイデオロゲン側の一種の無意味な無知さえなかつたら、この結合は現在のわが国でもある程度まで成功するだろうと考えられる。

比較的若い自然科学者や技術家は、この点に就ついて相当有望なものがあるように見える。ただ彼等は一定のインスティチュートの支配者の意志に背くことが出来ないために、こうした文化的意図を節約せざるを得ないように見受けられる。併しかし彼等や又色々のイデオロゲンの意志がどうあるうとも、それとは独立に、現実はその圧力を若い自然科学者や技術家や乃至ないしその候補者の上に次第に及ぼそうとしていることを忘れてはならない。

失業の波は若い彼等の生活を脅かし始めている。之は一時の軍需インフレの類によつて是正され得るものでない。彼等は自然科学者としてのまた技術家としての自分の社会的地位に就ついて反省し始める。こうして彼等の自然科学や技術は、従来の先輩のそれとは異つた色彩を帯びて来るだろう。

彼等は必然的にイデオロゲンと握手せざるを得ない。だがその時は彼等が唯一の牙城であるイン
ステイチユートを一時思い切らねばならぬようになる時でもあるのだ。

(一九三四)

-
- 「自然科学者と生活意識」(『戸坂潤全集』第五卷、勁草書房、一九七四年九月、第五刷)所収。
 - PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X} 2_{\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、`dvipdfmx`を使用した。
 - 科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」
<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/scilib.html>
 - 「科学図書館」に新しく収録した文献の案内「科学図書館揭示板」
<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>